

総合内科や感染症の臨床、研究、教育にたずさわってきた仲間が福島に集う

加藤 隼悟

福島県立医科大学総合内科・臨床感染症学講座准教授／公益財団法人仁泉会北福島医療センター総合内科・感染症科



前ページで紹介してきた福島県立医科大学総合内科・臨床感染症学講座／公益財団法人仁泉会北福島医療センター総合内科・感染症科の立ち上げメンバーのひとりが加藤隼悟氏だ。加藤氏は、もともと熱帯医学に興味を持ち、長崎大学などで診療や研究に従事していた。それがなぜ、福島県で働くことになったのだろうか。

熱帯医療の現場では高い臨床力が必要と痛感

今年2月より、福島県内での勤務を開始しました。今回、幸運にも寄稿の機会をいただいたので、ここにいたる道のりを振り返ってみたい。

私は、医学生時代からの目標であった熱帯医学を学ぶべく、初期研修終了後に長崎大学感染症内科（熱研内科）に入局しました。そこで後期研修を受けていた際、フィリピンで2ヵ月ほど熱帯感染症研修に行くことができました。この経験は、予想を上回る果実をもたらしてくれ、私は「熱帯医学は感染症の知識だけではダメで、根底に幅広い臨床力がないと、熱帯医療現場において、本当に役立つ能力は得られない」と思うようになりました。そこで、後期研修を修了すると、臨床力を鍛えるべく、当時、熱研内科の社会人大学院生でもあり、北海道の江別市立病院で総合内科を立ち上げていた濱口杉大先生（現・福島県立医科大学総合内科教授）のもとへ師事しに行きました。

濱口先生はロンドン大学衛生熱帯医学大学院に留学経験をお持ちで、自分も同じように留学したいという憧れがあったのですが、幸いにも後に熱帯医学を体系的に学ぶために英国留学を実現できました。留学先は世界中から猛者が集まる場だったので、どんな人物が世界保健機関（WHO）や国

Profile

かとう・しゅんご

- 2007年 琉球大学医学部卒業
国立病院機構長崎医療センター初期研修医
- 2009年 長崎大学病院感染症内科（熱研内科）後期研修医
長崎大学熱帯医学研究所臨床感染症学分野医局員
- 2010年 江別市立病院総合内科
- 2012年 ロンドン大学衛生熱帯医学大学院修士課程・同熱帯医学衛生ディプロマ留学
- 2013年 長崎大学病院感染症内科（熱研内科）医員
- 2014年 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程社会人大学院生
- 2018年 長崎労災病院総合内科部長
- 2020年 長崎労災病院初期臨床研修プログラム責任者
- 2021年 福島県立医科大学総合内科・臨床感染症学講座准教授
公益財団法人仁泉会北福島医療センター総合内科・感染症科

境なき医師団（MSF）、超一流研究機関などで働くこととするのかを垣間見られました。周囲の人々とくらべて、自分は臨床も研究もまだまだ経験不足であると痛感したものです。

そのため帰国後は、さらなる研鑽を積もうと長崎大学病院で感染症診療に専従し、博士課程にも進学しました。大学院では、ベトナムを拠点に熱性疾患患者を対象にしたリケッチア症、特にツツガムシ病に関する診断・臨床疫学研究に取り組みました。

このようにさまざまな経験を重ねてもなお、自分の中には臨床力不足の不安が残っていました。そんな私に対し長崎労災病院感染症内科部長だった古本朗嗣先生（現・長崎大学病院感染症医療人育成センター教授）が支援してくださり、私は、長崎労災病院での総合内科の立ち上げ、医局の後輩や研修医への指導、高次臨床学生教育にたずさわる好機に恵まれました。当時、初めて就いた管理職の立場で無力さを思い知らされたつとも、臨床教育の難しさや楽しさを浴びるよう実感していました。

同じ背景を持つ仲間が福島に集まる喜び

そんな日々をすごしていた自分が、どうして福島県に来ることになったのか。これには、いくつかの要因があります。何より大きいのは、仲間とのつながりです。前述の濱口先生は、2016年に福島

県立医科大学総合内科を立ち上げられたのですが、その濱口先生の支援のもと、2020年10月に同大学の寄附講座として総合内科・臨床感染症学講座が3名の特任教官によって新設されることとなり、教授として山藤栄一郎先生に白羽の矢が立ち、あとの2名に安田一行講師と私が指名をいただいたのです。実はメンバー全員が長崎大学熱研内科で博士課程を修めており、それぞれの場で感染症や総合内科の臨床、研究、教育に従事していました。この同じバックグラウンドを持つ仲間とともに福島で仕事ができるのは、私にとってたいへん魅力的でした。

また、個人的な要因として東日本大震災後の経緯もありました。当時、勤務していた江別市立病院からは、順番に被災地への応援派遣が行われていたのですが、「次は自分が」というタイミングで派遣が打ち切りになりました。本当に行こうと思えば、市立病院派遣という形式でなくとも方法はあったはずですが、しかし結果的に、自分は一度も東北には行きませんでした。

その後、2016年4月に熊本地震があったとき、長崎にいた私はNPO法人ジャパンハートの活動に協力しました。現地に赴いた私は、あらためて被災地支援の重要性を知り、何よりも被災者の抱える苦労は延々とつづくという現実を目の当たりにしました。

今回の福島へのお誘いは、ある意味、襖

診療と教育を行いながら研究も展開していく

福島の地でお役に立てるチャンスをいただいたからには、自分の経験を生かして地域や福島県全体の未来に貢献できるように努める所存です。

当講座の使命は、公益財団法人仁泉会北福島医療センターにおいて、地域医療を支える診療と教育に従事しながら、研究も手がけることです。地域医療の現場で取り組む研究として、当講座教官が経験してきた感染症に関する臨床疫学研究は最適と考えます。現在は、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっていますが、そもそも福島県は国内でも有数のツツガムシ病流行地であり、動物媒介性疾患も無視できません。こうした疾患を対象とした臨床疫学研究を通じて地域や医学への貢献を果たしつつ、研究が日々の診療や臨床教育の質も向上させていくことを目標にしています。

質の高い臨床や研究を実践できる環境はそこで触れ合う若手医師らが経験を共有することにより、将来の福島の医療をいっそう輝かせることができると信じています。



北福島医療センターにて。左から筆者、山藤氏、安田氏